愛知県立大学
教員の自己点検･自己評価

－　自己点検・自己評価報告書 －

２０２０年度

はしがき

愛知県立大学学長　　久冨木原　玲

今日、大学教員は本来的な使命である教育研究に加えて、「第3の使命」としての社会貢献(中教審「我が国の高等教育の将来像」学校教育法 83 条 2 項)、さらに近年は全学的な教学マネジメント(中教審教育部会審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」)まで、きわめて広汎な責務を負っています。

さらに大学には、教員が上記の職務を果たしているかどうかについて自己点検・自己評価を実施し、それを公表することによって、社会に対する説明責任を果たす責務が課されています(中教審「我が国の高等教育の将来像」)。

本学は公立大学として、教員の公的な活動について広く県民に公開する責任があることを認識して、かなり早い段階から各教員の「自己点検・自己評価報告書」を作成してきました。また、教学の最高決定機関である教育研究審議会に付置された評価委員会において、自己点検・自己評価の項目や方法を絶えず検証し、各教員の教育・研究、教学マネジメント、社会貢献活動の質向上に努めています。本来、自己点検・自己評価は、各教員が独創的な研究とそれに基づく良質な教育を行うために、教員自身の諸活動を自ら点検し、主体的に省察する営みです。

平成23年度と30年度には、この自己点検・自己評価も含めた大学評価・学位授与機構の認証評価を受けました。23年度については、毎年「自己点検・自己評価書」の作成・公表を行っていることが「優れた点」とされました。さらに30年度は「教員人事評価を組織的に行ない、その結果を教員の処遇に反映させている」として評価されましたが、一方で改善点として、「点検を改善に結びつける教育・研究の質保証体制や方法の整備に弱い面がある」という指摘を受けました。これは「自己点検・自己評価」のみに関するコメントではありませんが、今後、本学が取り組むべき枢要な課題として受け止めています。

「内部質保証」は、近年、認証評価項目として重要視されてきており、昨年度は公立大学協会が独自に「大学教育質保証・評価センター」を設立しました。本学もこれに入会し、内部質保証体制の強化を始めたところです。今年度は、「内部質保証推進規程」を定め、内部質保証推進に責任を負う組織として、学長のもとに「内部質保証推進委員会」を設置しました。また、他大学の取り組みを知るために本学が依頼した講師による教育・研究質向上セミナーを開催するなど、内部質保証体制の構築と継続的な改善に向けた活動を推進中です。

今後は、教員それぞれが、全学的な方針を念頭に、教育、研究、及び地域貢献等の実施、改善に主体的に取り組むと共に、大学全体として自主自立的な PDCA サイクルを実施する方法や組織のあり方を見直し、再構築していかなければならないと考えています。

愛知県立大学

教員の自己点検・自己評価

２０２０年度自己点検・自己評価報告書

目　　次

愛知県立大学概要

第１章　自己点検・自己評価の様式 1
１．１　自己点検・自己評価項目 1
１．２　目標と自己評価 2

第２章　自己点検・自己評価結果の概要 5

第３章　教員の自己点検・自己評価データ 13
３．１　外国語学部 13
英米学科 15
ヨーロッパ学科 59
フランス語圏専攻 59
スペイン語圏専攻 79
ドイツ語圏専攻 101
中国学科 123
国際関係学科 147
３．２　日本文化学部 179
国語国文学科 181
歴史文化学科 199
３．３　教育福祉学部 219
教育発達学科 221
社会福祉学科 251
３．４　看護学部 277
看護学科 279
３．５　情報科学部 381
情報科学科 383
３．６　国際戦略室 445
国際戦略室 447
３．７　教養教育センター 451
教養教育センター 453
３．８　グローバル実践教育推進室 463
グローバル実践教育推進室 465

おわりに 469

愛知県立大学概要

愛知県立大学は、1947 年、愛知県立女子専門学校として創設されて以来、1966 年の共学・４年制愛知県立大学の創立と外国語学部の開設をへて、1998 年に長久手町に移転し、その際、情報科学部および文学部・外国語学部における３学科を新設し、昼夜開講制の全面実施、大学院国際文化研究科の設置を行ってきた。また、2002 年には情報科学研究科を開設した。

一方、愛知県立看護大学は、1968 年に愛知県立看護短期大学として創設されて以来、1995 年に 4 年制の大学として開学し、1999 年に大学院看護学研究科看護学専攻修士課程を、また、2003 年に看護学部に助産師コースを設置し、2007 年に大学院修士課程に専門看護師コース、2008 年に看護実践センターに認定看護師教育課程（がん化学療法看護、がん性疼痛看護）を設置してきた。

新しい愛知県立大学は、2009 年、「良質の研究に基づく良質の教育」をモットーとし、また、母体となったふたつの大学の良き伝統を継承しつつ、文系、理系双方の学部を擁する複合大学としてスタートした。外国語学部、日本文化学部、教育福祉学部と情報科学部をおく「長久手キャンパス」と看護学部をおく「守山キャンパス」を有する新愛知県立大学は、本年度に至るまで愛知県地域におけるその時々の高等教育のニーズに呼応した教育・研究活動を展開してきている。

・学部・研究科・附置研究所等の構成

(学部)　外国語学部（英米学科、ヨーロッパ学科、中国学科、国際関係学科）
日本文化学部（国語国文学科、歴史文化学科）
教育福祉学部（教育発達学科、社会福祉学科）
看護学部（看護学科）
情報科学部（情報科学科）

(研究科)　国際文化研究科
人間発達学研究科
看護学研究科
情報科学研究科

(関連組織)　入試・学生支援センター
教育支援センター
教養教育センター
学術研究情報センター
地域連携センター
看護実践センター

(研究所)　多文化共生研究所
通訳翻訳研究所
文字文化財研究所
生涯発達研究所
情報科学共同研究所
次世代ロボット研究所

(関連施設)　大学附属図書館
講堂・学術文化交流センター

・　**学生総数及び教職員総数**（令和２年５月１日時点）

（学生総数）：学部　３，２４７名、大学院　２３３名
（教員総数）：２０９名
（教員以外の職員総数）：９５名（職員３５、派遣職員１０、契約５０）

第１章　自己点検・自己評価の様式

１．１　自己点検・自己評価項目

平成３０年度～令和２年度の３カ年の実績等を基にして、以下の項目について本年度の目標・計画に対する自己評価を行った。

Ⅰ　研究活動　（ウェイト　%）
○ 研究課題
○ 学界動向と研究課題の関係
○ 目標・計画
○ 過去３年間の研究業績（特許なども含む）
○ 科学研究費補助金等への申請状況、交付状況等（学内外）
○ 自己評価

Ⅱ　教育活動　（ウェイト　%）
○ 目標・計画
○ 専門教育科目（講義・演習）
○ 一般教育科目（講義・演習）
○ 大学院授業科目
○ 論文指導・研究指導
○ 自己評価

Ⅲ　大学運営　（ウェイト　%）
○ 目標・計画
○ 学内委員など
○ 自己評価

Ⅳ　社会貢献　（ウェイト　%）
○ 目標・計画
○ 学会活動など
○ 地域連携・地域貢献など
○ 自己評価

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流など）

Ⅵ　総括（リフレクションを含む）

１．２　目標と自己評価

本年度も前年度の書式を継承し、年度はじめに目標・計画を記入し、報告書作成時に同一シートに結果と自己評価を追記する方法とした。また、自己評価について、３通りの文言のいずれかでまとめることにより客観性を持たせた。十分でない場合は必要に応じて改善策を記入することとした。以下に自己評価の項目を示す。

＜目標・計画、ウェイト＞
年度はじめに**目標・計画**および**ウェイト**（合計が 100%）を記入し、委員に提出する。

＜自己評価＞
研究活動、**教育活動**の自己評価では、理由を記すとともに最後は下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり達成できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね達成した」の場合は、改善策があれば書くこと。

・目標を十分達成した。
・おおむね目標を達成した。
・目標をあまり達成できなかった。

大学運営の自己評価では、理由を記すとともに、下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり貢献できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね貢献した」の場合は、改善策があれば書くこと。

・大学運営に十分貢献した。
・大学運営におおむね貢献した。
・大学運営にあまり貢献できなかった。

社会貢献の自己評価では、理由を記すとともに、下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり貢献できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね貢献した」の場合は、改善策があれば書くこと。

・社会に十分貢献した。
・社会におおむね貢献した。
・社会にあまり貢献できなかった。

＜総括＞
全体の総括では、過年度の成果・課題をふまえて、リフレクション（教員自身の振り返り）を意識した記述に努めること。

自己点検自己評価の妥当性を高めるため、昨年度に引き続き、以下の項目について本人以外（各学部で選出）の複数名体制で形式面のチェックをし、満足しない場合は修正を依頼した。

○　**目標・計画**
・目標が記述してあるか
・目標に対して具体的な計画が記述してあるか

○　**研究業績**、**教育業績**、**学内委員**、**学会活動**、**社会貢献**など
・具体的に記述してあるか

○　**自己評価**
・目標・計画の達成度等を含め、実績を基に自己評価されているか
・「十分貢献/達成した」、「おおむね貢献/達成した」、「あまり貢献/達成できなかった」のいずれかでまとめられているか
・「あまり貢献/達成できなかった」の場合は、その後に改善策などが書かれているか

○　**総括**
・リフレクションが含まれているかどうか

前年度に引き続き、自己点検自己評価の妥当性を高めるため、自己点検自己評価の各項目について本人以外（各学部で選出）の複数名体制（表１-１）で形式面をチェックし、チェック事項の条件を満足しない場合は修正を依頼した。

表1－1　チェック体制

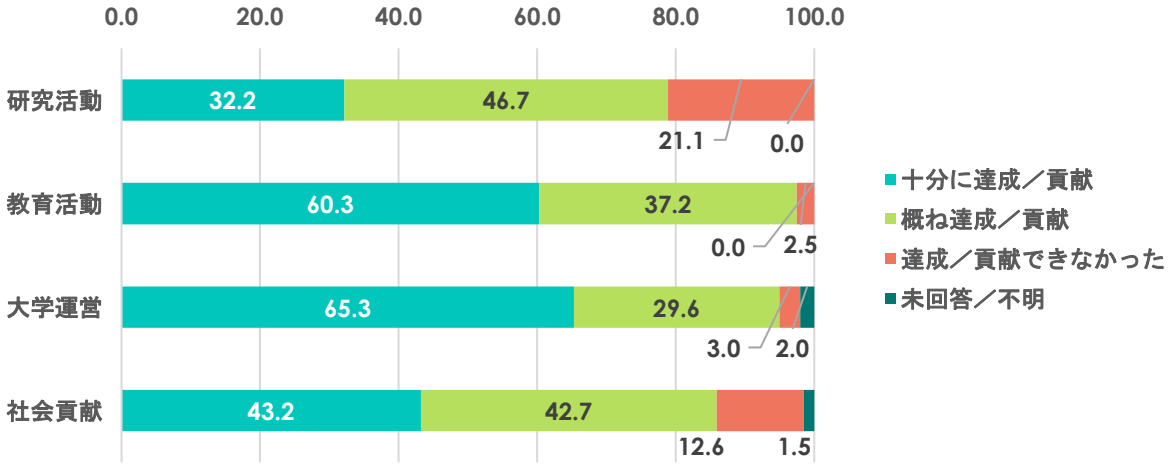
学部	体制	備考
外国語学部	学部評価委員＋５名	
日本文化学部	学部評価委員＋１名	
教育福祉学部	学部評価委員＋１名	
看護学部	学部評価委員＋１名	
情報科学部	学部評価委員＋４名	
教養教育センター	センター長・副センター長	

第２章　自己点検・自己評価結果の概要

自己点検・自己評価のうち、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献についての自己評価における達成度（十分達成／貢献、おおむね達成／貢献、達成／貢献できなかった）の割合を以下に示す。

２．１　大学全体の達成度

１　項目別割合



２　実数（199 名）

項目	十分に達成／貢献	概ね達成／貢献	達成／貢献できなかった	未回答／不明
研究活動	64	93	42	0
教育活動	120	74	5	0
大学運営	130	59	6	4
社会貢献	86	85	25	3

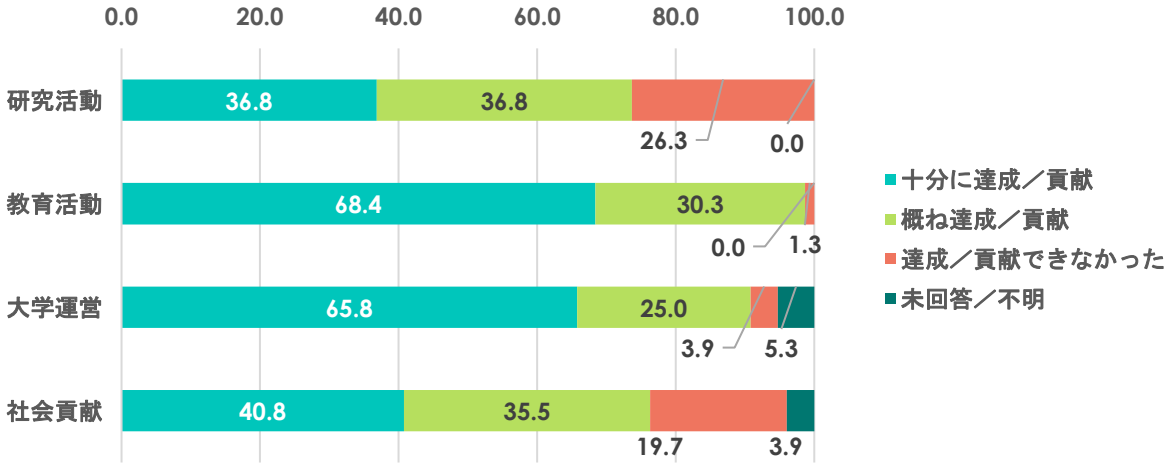
図 2-1　項目別自己評価結果（大学全体（5 学部））

全学では、「研究活動」「教育活動」「大学運営」「社会貢献」の４項目のうち、「十分に達成／貢献」または「概ね達成／貢献」と回答している割合が最も高かった項目は、昨年度と同様、「教育活動」（97.5％）であり、僅差で「大学運営」（95.0％）が続く。これは数値的にも昨年度とほぼ同様である。「十分に達成／貢献」に限定すると、「教育活動」が 60.3％、「大学運営」が 65.3％と高く、各々、昨年度と比べて 1.2％、2.6 ％向上している。一方、「研究活動」「社会貢献」については大きく落ち込んでいる。「達成／貢献できなかった」と評価している割合が他の項目より多く、「研究活動」は 21.1％、「社会貢献」は 12.6％にのぼり、各々、昨年度と比べて 9.0％、7.5％増加している。これは、コロナウイルス感染症拡大の影響により、学会やイベント等の開催が中止されたり延期されたりして、十分に研究活動や社会貢献が行えなかったためと推測される。例年とは異なる傾向となったが、社会情勢の変化に合わせて、バランスよく改善していくことが望まれよう。詳しくは、次ページ以降の各学部の分析を参照されたい。

以下、各学部の概要を示す。

２．２　外国語学部

１　項目別割合



２　実数（76 名）

項目	十分に達成／貢献	概ね達成／貢献	達成／貢献できなかった	未回答／不明
研究活動	28	28	20	0
教育活動	52	23	1	0
大学運営	50	19	3	4
社会貢献	31	27	15	3

図 2-2　項目別自己評価結果（外国語学部）

学部概要

今年度は Covid-19 の感染拡大の影響により、いずれの教員も「例年通り」とは行かず試行錯誤しながら駆け抜けた様子が、今年度のシートから読み取ることができる。学部全体としては、教育活動、大学運営の達成／貢献度が高い。「十分に達成／貢献」の回答だけでもそれぞれ 68%、66%で例年以上であり、特に教育活動では、「概ね達成した」を加えると 99%の教員が目標達成としている。以下、項目ごとに今年度の特徴的な記述を拾っていく。

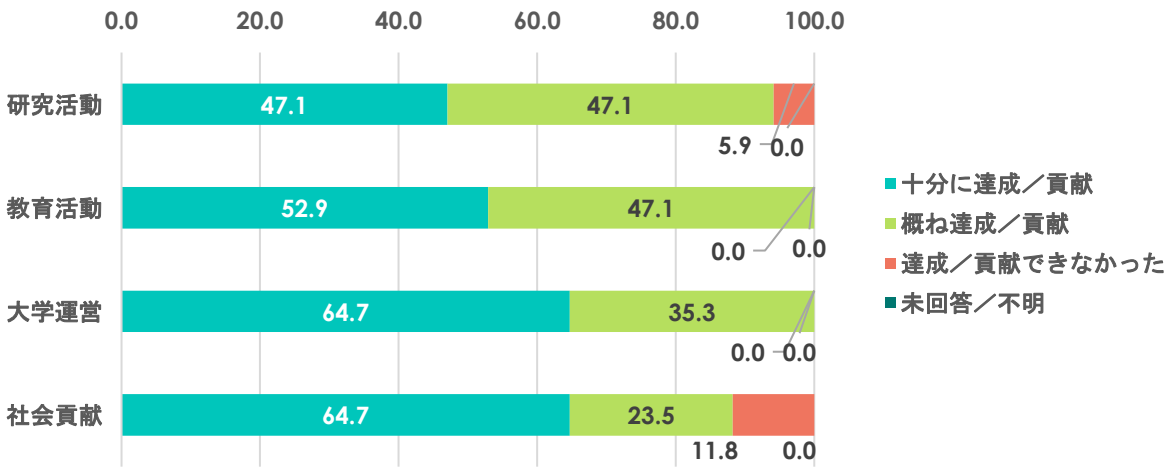
■研究：教育や大学運営の目前の課題対応で、獲得した外部資金の研究に時間が割けないジレンマ、自らの業務バランスの改善が大きな課題であると、複数の教員から記述があった。また、海外を含めフィールド調査を基盤とした研究計画の予定変更・停滞をあげる教員も多く、新たな研究手法・研究課題を探る段階に入っている者もあった。研究成果の発表の場としての国内外の学会中止なども多く、研究活動が例年に比して達成度が低いと言う自己評価の結果となっている。一方、オンライン業務の経験が今後の研究に生かせるというポジティブな視点もあった。

■教育：遠隔授業教材の開発と対応に伴い、仕事量・仕事時間が大幅に増加したと言う意見が大勢であった。しかし「オンライン授業実践にそれなりの手応えを感じた」「今までの自分の授業の不備に気づく良い機会となった」「インターネットを用いた教育技術等についての知見を得た」「資料の提示が容易になるというメリットがあった」「遠隔授業で反転授業を試み、ICT 活用について様々な実験的取組を始めた」など、授業運営のスキル向上を実感する声が多くあった。同時に「意識的に学生とのコミュニケーションをとる工夫をした」「学生の問題意識をよく把握できるようになってきた」「復習を可能とする授業の動画配信が受講生から高く評価された」「大学が提供するプラットフォームを十分に活用できたことで、教育活動については学生の学びが例年よりも深まった」と、すでに新しい形での教育の可能性を積極的に評価できる段階にある。こうしたことが、教

育活動の自己評価の高さにつながったようである。
■大学運営：入試や教務などにおいて、日常的に想定外の事態・トラブルが頻発し「その対応に追われている大変な毎日だった」ことから、貢献したという実感が生じているのではないか。「一部の学内業務や授業活動については、今後もオンラインでの実施の可能性がある」という気づきを肯定的に評価したいとする意見もあった。
■地域貢献：イベントなど行事がなくなる一方で、徐々に学会等がオンライン開催にシフトされてきて、それなりにできる形での貢献が可能となったことで、自己評価の結果は例年並みとなっている。
　世界規模のパンデミックの影響が継続する中、「心身の状態は限界に近い」「疲労困憊で余裕がなく体調を崩した」「教育面における負担や不安が大きい」「バランスが上手くとれず中途半端になりがちでそれがストレス」など、健康面で心配な状況も散見する。「同僚との意見交換や協力がなければ難しかった」という意見が象徴するように、次年度に向けて心身に不調を来すことのないよう、組織内で協力し助け合うことが何より重要だと感じる。

２．３　日本文化学部

１　項目別割合



２　実数（ 17 名）

項目	十分に達成／貢献	概ね達成／貢献	達成／貢献できなかった	未回答／不明
研究活動	8	8	1	0
教育活動	9	8	0	0
大学運営	11	6	0	0
社会貢献	11	4	2	0

図 2-3　項目別自己評価結果（日本文化学部）

学部概要

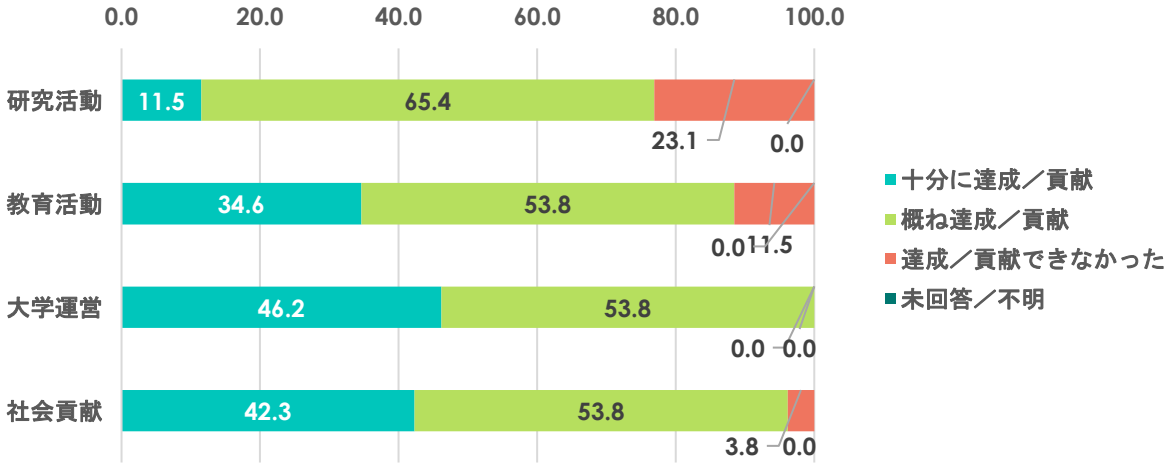
感染症拡大による多方面からの制約で、研究・教育・大学運営・社会貢献のあらゆる活動のあり方を再検討し、再構築する必要に迫られた１年であった。不測の事態への対応が常態化する日々のなか、当初は悪戦苦闘しつつも、ほぼすべての構成員が自分なりの方法で柔軟に対応し、諸活動の新たな可能性を見出していると言える。全項目において、「十分に／概ね達成／貢献」の比率が高い所以である。

研究活動において未達成のケースは、成果物のかたちに至らなかった点を指してのことであるが、教育活動の過程で、すでに１冊の書籍に匹敵するほどの執筆をおこなっていた。これを踏まえて、次年度にはそれが研究成果として結実させる旨総括されている。社会貢献を未達成と評した２名の構成員のうち１名は、長期療養休暇から復帰し、来年度以降少しずつ療養以前の水準にまで達成度を拡げると振り返るが、他の３項目では目標は達成されている。他の１名は現地調査や地域に根差した研究教育活動を行っているが、移動の制約によりこの前提が崩れ、今年度の未達成の自己評価となった。来年度は、今年度の蓄積を生かした社会貢献を模索することを掲げている。

総じて、学部構成員は、活動が制約された状況に置かれながらも、対面とオンラインを巧みに混合する活動によって、様変わりした研究教育環境に柔軟に対応してきた。それゆえに、全体としてリフレクションには、今年度の経験を十分に活かした来年度以降のさらなる改善と展開を描く点に共通性ないし類似性が認められる。

２．４　教育福祉学部

１　項目別割合



２　実数（26 名）

項目	十分に達成／貢献	概ね達成／貢献	達成／貢献できなかった	未回答／不明
研究活動	3	17	6	0
教育活動	9	14	3	0
大学運営	12	14	0	0
社会貢献	11	14	1	0

図 2-4　項目別自己評価結果（教育福祉学部）

学部概要

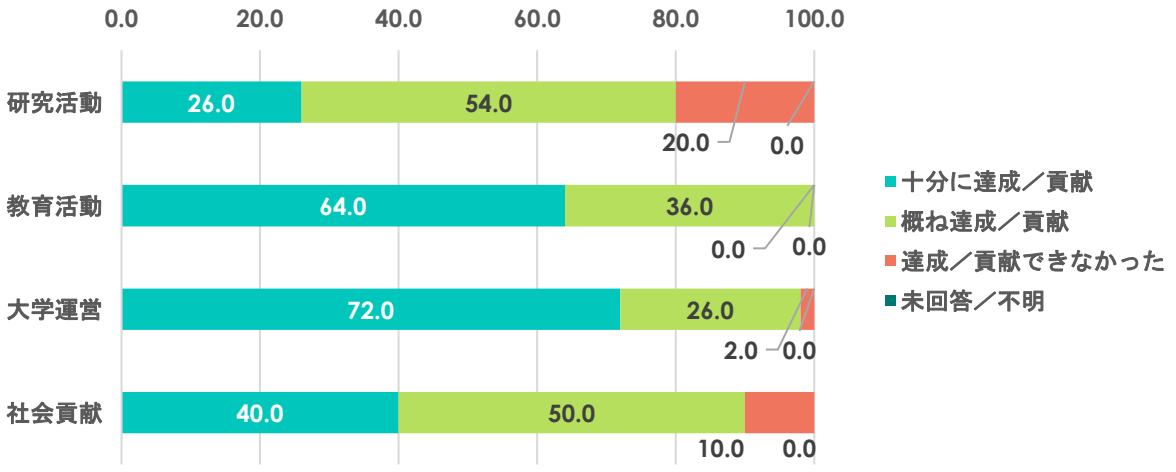
研究活動では、全体の約 77%が目標を「十分」/「概ね」達成できたと評価しているものの、昨年度と同様、6 名が「達成できなかった」としている(一昨年度は 3 名)。その理由の第一は、コロナ禍による研究への直接的影響である。国内外での実験や調査、フィールドワークの実施困難や学会発表の中止、遅延に伴い、研究を遂行すること自体が困難になっている。第二は、大学運営等の業務により、研究時間の捻出が難しい現状である。この点は例年指摘されている内容と重なるが、今年度は更にそれに加えて異例な対応に追われたことも影響していると思われる。

今年度、コロナ禍の影響を強く受けた教育活動では、全体の約 88%が目標を「十分」/「概ね」達成できたと評価している。デジタル機器を使った動画コンテンツの作成を始め、新たな遠隔授業の展開に向けて各教員が多くの時間を費やし、工夫を重ねている。遠隔実施が難しい実技系科目の教授方法は、引き続き大きな課題である。一方、大学運営では、全教員が目標を「十分」/「概ね」達成できたと評価している。記述内容からは、コロナ禍による様々なイレギュラーな事態に翻弄されながらも、様々な事案に真摯に対応してきたことが窺われる。社会貢献では、全体の 96%が目標を「十分」/「概ね」達成できたと評価している。各自の専門領域の知見を活かして、学会活動（各種学会の運営委員や理事、学会誌編集委員等）や社会的活動に積極的に関与している。例年同様、地域貢献活動においては、自治体関連の各種委員や研修会講師等の役割を多く担っている。

コロナ禍の制約が大きいと予想されたが、全体的には、「研究活動」「教育活動」「大学運営」「社会貢献」ともに、例年と大きく変わらない評価結果であった。各教員のリフレクションにおいては、可能な範囲で様々な変化に対応（適応）し、教育、研究活動において地道な努力を重ねている現状が窺われた。

２．５　看護学部

１　項目別割合



２　実数（50 名）

項目	十分に達成／貢献	概ね達成／貢献	達成／貢献できなかった	未回答／不明
研究活動	13	27	10	0
教育活動	32	18	0	0
大学運営	36	13	1	0
社会貢献	20	25	5	0

図 2-5　項目別自己評価結果（看護学部）

学部概要

研究活動においては、80.0%の教員が目標を十分に、あるいは概ね達成できたと評価した。しかし、今年度は昨年度に比較して 12%も低い値であった。その理由として新型コロナウイルス感染症の感染拡大（以下コロナ禍とする）への対応のため、その対応に時間を費やし十分な研究活動時間が持てなかったことや、フィールドでの制約などがあり、困難をきたしたと考える。特に 2 回に及ぶ緊急事態宣言の発出により、県外などの移動の自粛なども影響したと考える。一方、達成できなかったと回答された方においては、昨年より 12%増加していた。理由はやはりコロナ禍の影響のため、研究活動が進められなかったと回答されていた。また、自己の目標設定に対して、予定通り進められなかった研究活動を厳しく評価した結果と解釈できるものもある。以上のことより、今年度はコロナ禍の影響もあり、看護学部は研究活動に対して、昨年より低い値であったと評価する。

教育活動では、全員が十分に、あるいは概ね目標を達成できたと評価した。看護学部は必修の授業科目に加えて多くの演習や臨床実習指導を行うが、コロナ禍のために、オンラインによる授業変更や学外実習の受け入れ困難によるオンライン実習やオンライン演習など、臨機応変に学生の教育の質の担保し対応していたと思われる。教員全員が強い責任感と熱意をもって教育活動に取り組んだ結果と評価する。

大学運営でも、98.0%が十分に、あるいは概ね目標を達成できたと評価した。教員が委員として何らかの委員会に所属しているが、実際にそこで活発な活動が行われた結果であると評価する。

社会貢献では、90.0%の教員が十分に、あるいは概ね目標を達成できたと評価した。この値は昨年より 6%下がっていた。ほとんどの教員が学外での学会運営、地域住民の健康増進活動、臨床看護師の研究支援等を意識して積極的に活動している結果と評価する。しかしながら、10%の教員は、社会貢献が十分にできなかったと評価をしている。その理由は、コロナ禍への対応のため時間を費やし、十分な社会貢献ができなかったことや

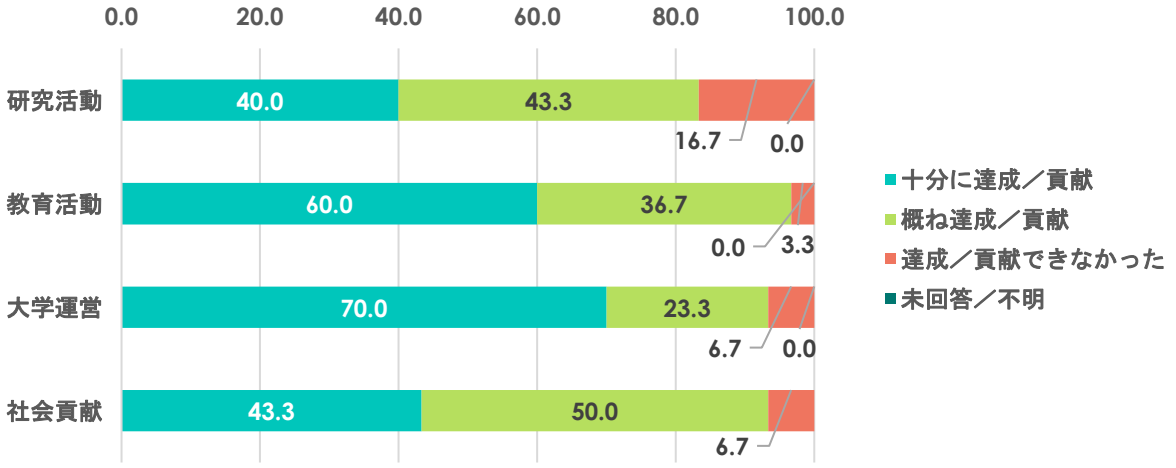
学会や研究会は軒並み中止となったためと評価をしている。

教員自身によるリフレクションでは、目標達成に不足していたと思われる部分についての分析と改善策が記されており、活動全般に対する真摯な姿勢が伺われた。

これらの評価を総合すると、教育活動については前年度と比べて目標達成度はほぼ変化がなく達成できていた。しかしそれ以外の項目については、2019 年度に比較して、研究・大学運営・社会貢献の全般にわたって、コロナ禍の影響を受けていることが伺える。そのような厳しい状況の中でも、教員は活発に活動しほぼ目標を達成できたと判断できる。

２．６　情報科学部

１　項目別割合



２　実数（30 名）

項目	十分に達成／貢献	概ね達成／貢献	達成／貢献できなかった	未回答／不明
研究活動	12	13	5	0
教育活動	18	11	1	0
大学運営	21	7	2	0
社会貢献	13	15	2	0

図 2-6　項目別自己評価結果（情報科学部）

学部概要

コロナ禍により研究・教育活動を始めとした多くの活動に支障をきたしたとの評価が多かった。国際会議や出張などの停止による研究活動への影響は容易に想像できる。特に、リモート講義の準備に多くの時間を取られたという振り返りが多いが。努力のかいがあり、完成度が高い動画コンテンツを作成でき、学生からの評判もよかったという記述も見受けられた。

リモートによる研究・教育手法について学ぶきっかけになり。こうした成果を今後の研究・教育活動に活かしていきたいという前向きな意見もみられた。また、リモート化に伴い、これまでの講義の改善点が発見される契機になり、自分の教育スタイルを見直すというプロセス改善が図らずとも行われたことは興味深い。さらに、作成した動画コンテンツやe-Learning システムを継続的に評価・洗練させることで、来年度以降の品質改善活動に繋げるという動きも始まりつつあり、今年度に培われた教育コンテンツや種々のノウハウが、次年度の社会貢献活動にもつながることを期待したい。

大学運営も他の活動と同様に手探りであり、新型コロナウイルスへの対応による仕事の変更・増大とリモート化による効率化がせめぎあった状態であり、さらなる改善が必要である。

すべてが想定外の一年だったが、ICT の進歩と責任を実感した一年でもあり、学部の使命を改めて認識し、さらなる社会への貢献の必要性を感じた。この総括において、激動の一年と自分の活動を見直した結果、自分の置かれている状況と立場、自分の活動状況を再確認することができ、有意義であった。

第３章　教員の自己点検・自己評価データ（教員名簿、教員の自己点検・自己評価結果）

３．１　外国語学部

● 英米学科

△ 阿南　東也
○ 池田　周・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
○ 石原　覚・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
○ 榎本　洋・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
○ オオカドゴーフ・デミエン・・・・・・ 22
○ 大森　裕實・・・・・・・・・・・・・・ 24
○ 奥田　泰広・・・・・・・・・・・・・・ 26
○ オムラティグ・ロサ・・・・・・・・・・ 28
○ カステヤーノ・ワキーン・エマニュエル 30
○ 梶原　克教・・・・・・・・・・・・・・ 32
○ 木全　滋・・・・・・・・・・・・・・・ 34
○ 熊谷　吉治・・・・・・・・・・・・・・ 36
○ 袖川　裕美・・・・・・・・・・・・・・ 38
○ 瀧内　陽・・・・・・・・・・・・・・・ 40
○ 久田　由佳子・・・・・・・・・・・・・ 42
○ 広瀬　恵子・・・・・・・・・・・・・・ 44
○ ヘイスティングス・クリストファー・ロバート 46
○ 三原　穂・・・・・・・・・・・・・・・ 48
○ 村山　瑞穂・・・・・・・・・・・・・・ 50
○ 森田　久司・・・・・・・・・・・・・・ 52
○ 菊池　好行・・・・・・・・・・・・・・ 54
○ 佐藤　雅哉・・・・・・・・・・・・・・ 56

● ヨーロッパ学科　フランス語圏専攻

○ 天野　知恵子・・・・・・・・・・・・・ 60
○ 伊藤　滋夫・・・・・・・・・・・・・・ 62
○ 岸本　聖子・・・・・・・・・・・・・・ 64
○ 白谷　望・・・・・・・・・・・・・・・ 66
○ ダレン・モルガン・・・・・・・・・・・ 68
○ 中田　晋自・・・・・・・・・・・・・・ 70
○ 長沼　圭一・・・・・・・・・・・・・・ 72
○ 原　潮巳・・・・・・・・・・・・・・・ 74
○ モラール・フランク・・・・・・・・・・ 76
△ 野内　美子

● ヨーロッパ学科　スペイン語圏専攻

○ 糸魚川　美樹・・・・・・・・・・・・・ 80
○ 江澤　照美・・・・・・・・・・・・・・ 82
○ 奥野　良知・・・・・・・・・・・・・・ 84
○ 小池　康弘・・・・・・・・・・・・・・ 86
○ 竹中　克行・・・・・・・・・・・・・・ 88
○ 田邊　まどか・・・・・・・・・・・・・ 90
○ 谷口　智子・・・・・・・・・・・・・・ 92
○ ピナル・ガルシア・アレックス・・・・ 94
○ ﾛﾍﾟｽ･ﾛﾄﾞﾘｹﾞｽ・ﾌﾗﾝｼｽｺ･ﾊﾋﾟｴﾙ・・ 96
○ 渡会　環・・・・・・・・・・・・・・・ 98

● ヨーロッパ学科　ドイツ語圏専攻

○ アーリヒ・オリバー・・・・・・・・・・ 102
○ 池田　利昭・・・・・・・・・・・・・・ 104
○ 今野　元・・・・・・・・・・・・・・・ 106
○ 櫻井　健・・・・・・・・・・・・・・・ 108
○ 杉原　周治・・・・・・・・・・・・・・ 110
○ 人見　明宏・・・・・・・・・・・・・・ 112
○ 平井　守・・・・・・・・・・・・・・・ 114
○ 山本　順子・・・・・・・・・・・・・・ 116
○ 四ツ谷　亮子・・・・・・・・・・・・・ 118
○ ライヒェンベヒャー　クリストフ・・・ 120

● 中国学科

○ 袁　暁今・・・・・・・・・・・・・・・ 124
○ 王　幼敏・・・・・・・・・・・・・・・ 126
○ 川尻　文彦・・・・・・・・・・・・・・ 128
○ 工藤　貴正・・・・・・・・・・・・・・ 130
○ 黄　東蘭・・・・・・・・・・・・・・・ 132
○ 小座野　八光・・・・・・・・・・・・・ 134
○ 鈴木　隆・・・・・・・・・・・・・・・ 136
○ 張　金平・・・・・・・・・・・・・・・ 138
○ 月田　尚美・・・・・・・・・・・・・・ 140
○ 西野　真由・・・・・・・・・・・・・・ 142
○ 楊　明・・・・・・・・・・・・・・・・ 144

● 国際関係学科

○ 秋田　貴美子・・・・・・・・・・・・・・ 148
○ 東　弘子・・・・・・・・・・・・・・・・ 150
○ カールソン・アンドレア・・・・・・・・ 152
○ 亀井　伸孝・・・・・・・・・・・・・・・ 154
○ 木下　郁夫・・・・・・・・・・・・・・・ 156
○ 髙阪　香津美・・・・・・・・・・・・・ 158
○ 高橋　慶治・・・・・・・・・・・・・・・ 160
○ 半谷　史郎・・・・・・・・・・・・・・・ 162
○ 福岡　千珠・・・・・・・・・・・・・・・ 164
○ 藤倉　哲郎・・・・・・・・・・・・・・・ 166
○ ポープ・エドガー・ライト・・・・・・ 168
○ 宮谷　敦美・・・・・・・・・・・・・・・ 170
○ 矢野　順子・・・・・・・・・・・・・・・ 172
○ 山口　雅生・・・・・・・・・・・・・・・ 174
○ 山下　朋子・・・・・・・・・・・・・・・ 176

○ : 提出、△ : 長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

３．２　日本文化学部

● 国語国文学科		● 歴史文化学科	
○ 伊藤　伸江・・・・・・・・・・・・・・・	182	○ 井戸　聡・・・・・・・・・・・・・・・・	200
○ 久保薗　愛・・・・・・・・・・・・・・・	184	○ 大塚　英二・・・・・・・・・・・・・・・	202
○ 洲脇　武志・・・・・・・・・・・・・・・	186	○ 上川　通夫・・・・・・・・・・・・・・・	204
○ 中根　千絵・・・・・・・・・・・・・・・	188	○ 川畑　博昭・・・・・・・・・・・・・・・	206
○ 福沢　将樹・・・・・・・・・・・・・・・	190	○ 柴田　陽一・・・・・・・・・・・・・・・	208
○ 三宅　宏幸・・・・・・・・・・・・・・・	192	○ 中西　啓太・・・・・・・・・・・・・・・	210
○ 宮崎　真素美・・・・・・・・・・・・・・	194	○ 服部　亜由未・・・・・・・・・・・・・・	212
△ 本橋　裕美		○ 樋口　浩造・・・・・・・・・・・・・・・	214
○ 若松　伸哉・・・・・・・・・・・・・・・	196	○ 丸山　裕美子・・・・・・・・・・・・・・	216

○：提出、△：長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

３．３　教育福祉学部

● 教育発達学科		● 社会福祉学科	
○ 伊藤　稔明・・・・・・・・・・・・・・・	222	○ 宇都宮　みのり・・・・・・・・・・・・	252
○ 稲嶋　修一郎・・・・・・・・・・・・・・	224	○ 大賀　有記・・・・・・・・・・・・・・・	254
○ 内田　純一・・・・・・・・・・・・・・・	226	○ 田川　佳代子・・・・・・・・・・・・・・	256
○ 大貫　守・・・・・・・・・・・・・・・・	228	○ 湯　海鵬・・・・・・・・・・・・・・・・	258
○ 葛西　耕介・・・・・・・・・・・・・・・	230	○ 中尾　友紀・・・・・・・・・・・・・・・	260
○ 久保田　貢・・・・・・・・・・・・・・・	232	○ 野田　博也・・・・・・・・・・・・・・・	262
○ 瀬野　由衣・・・・・・・・・・・・・・・	234	○ 橋本　明・・・・・・・・・・・・・・・・	264
○ 高橋　範行・・・・・・・・・・・・・・・	236	○ 松宮　朝・・・・・・・・・・・・・・・・	266
○ 田村　佳子・・・・・・・・・・・・・・・	238	○ 村田　一昭・・・・・・・・・・・・・・・	268
○ 藤原　智也・・・・・・・・・・・・・・・	240	○ 山本　かほり・・・・・・・・・・・・・・	270
○ 堀尾　良弘・・・・・・・・・・・・・・・	242	△ 吉川　雅博	
○ 丸山　真司・・・・・・・・・・・・・・・	244	○ 渡邊　かおり・・・・・・・・・・・・・・	272
○ 三山　岳・・・・・・・・・・・・・・・・	246	○ 森川　夏乃・・・・・・・・・・・・・・・	274
○ 山本　理絵・・・・・・・・・・・・・・・	248		
△ 渡邉　眞依子			

○：提出、△：長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

３．４　看護学部

● 看護学科

○ 青島　京子・・・・・・・・・・・・・・・ 280
○ 足立　奈穂・・・・・・・・・・・・・・・ 282
○ 天木　伸子・・・・・・・・・・・・・・・ 284
○ 石光　芙美子・・・・・・・・・・・・・・ 286
○ 伊藤　裕子・・・・・・・・・・・・・・・ 288
○ 牛島　佳代・・・・・・・・・・・・・・・ 290
○ 宇城　令・・・・・・・・・・・・・・・・ 292
○ 大原　良子・・・・・・・・・・・・・・・ 294
○ 岡田　悦政・・・・・・・・・・・・・・・ 296
○ 尾沼　奈緒美・・・・・・・・・・・・・・ 298
○ 籠　玲子・・・・・・・・・・・・・・・・ 300
○ 賀沢　弥貴・・・・・・・・・・・・・・・ 302
○ 片岡　純・・・・・・・・・・・・・・・・ 304
○ 片岡　由美子・・・・・・・・・・・・・・ 306
○ 片平　正人・・・・・・・・・・・・・・・ 308
○ 勝村　友紀・・・・・・・・・・・・・・・ 310
○ 加藤　宏公・・・・・・・・・・・・・・・ 312
○ 金澤　美緒・・・・・・・・・・・・・・・ 314
○ 神谷　摂子・・・・・・・・・・・・・・・ 316
○ 汲田　明美・・・・・・・・・・・・・・・ 318
○ 黒川　景・・・・・・・・・・・・・・・・ 320
○ 小松　万喜子・・・・・・・・・・・・・・ 322
○ 近藤　三由希・・・・・・・・・・・・・・ 324
○ 佐々木　久美子・・・・・・・・・・・・・ 326
○ 佐藤　美紀・・・・・・・・・・・・・・・ 328
○ 柴　邦代・・・・・・・・・・・・・・・・ 330
○ 清水　宣明・・・・・・・・・・・・・・・ 332
○ 杉山　希美・・・・・・・・・・・・・・・ 334
○ 鈴木　幸子・・・・・・・・・・・・・・・ 336
○ 曽田　陽子・・・・・・・・・・・・・・・ 338
○ 田上　恭子・・・・・・・・・・・・・・・ 340
○ 津田　佐貴子・・・・・・・・・・・・・・ 342
○ 戸田　由美子・・・・・・・・・・・・・・ 344
○ 西尾　亜理砂・・・・・・・・・・・・・・ 346
○ 服部　淳子・・・・・・・・・・・・・・・ 348
○ 廣瀬　会里・・・・・・・・・・・・・・・ 350
○ 深田　順子・・・・・・・・・・・・・・・ 352
○ 藤野　あゆみ・・・・・・・・・・・・・・ 354
○ 古田　加代子・・・・・・・・・・・・・・ 356
○ 松岡　広子・・・・・・・・・・・・・・・ 358
○ 三尾　亜喜代・・・・・・・・・・・・・・ 360
○ 箕浦　哲嗣・・・・・・・・・・・・・・・ 362
○ 百瀬　由美子・・・・・・・・・・・・・・ 364
○ 森田　恵美子・・・・・・・・・・・・・・ 366
○ 柳澤　理子・・・・・・・・・・・・・・・ 368
○ 山田　浩雅・・・・・・・・・・・・・・・ 370
○ 横山　加奈・・・・・・・・・・・・・・・ 372
○ 吉田　彩・・・・・・・・・・・・・・・・ 374
△ 米川　美那
○ 米田　雅彦・・・・・・・・・・・・・・・ 376
○ 渡邉　直美・・・・・・・・・・・・・・・ 378

○：提出、△：長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

３．５　情報科学部

● 情報科学科

○ 伊藤　正英	384	○ 小林　邦和	414
○ 入部　百合絵	386	○ 佐々木　敬泰	416
○ 臼田　毅	388	○ ジメネス フェリックス	418
○ 大久保　弘崇	390	○ 代田　健二	420
○ 太田　淳	392	○ 鈴木　拓央	422
○ 奥田　隆史	394	○ 田坂　浩二	424
○ 小栗　宏次	396	○ 田　学軍	426
○ 小畑　建太	398	○ 辻　孝吉	428
○ 何　立風	400	○ 戸田　尚宏	430
○ 粕谷　英人	402	○ 永井　昌寛	432
○ 金森　康和	404	○ 平尾　将剛	434
○ 神谷　直希	406	○ 村上　和人	436
○ 神谷　幸宏	408	○ 山村　毅	438
○ 神山　斉己	410	○ 山本　晋一郎	440
○ 河中　治樹	412	○ 吉岡　博貴	442

○：提出、△：長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

３．６　国際戦略室

● 国際戦略室	
○ 桑村　昭・・・・・・・・・・・・・・・・・　448	

○：提出、△：長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

３．７　教養教育センター

● 教養教育センター	
○ クリストファー　ワイル・・・・・・・・　454	○ ブルノティ・ジョシュア・・・・・・・・　458
○ ジョーンズ・クレイグ　・・・・・・・・　456	○ フローレス　アナ・マリア　・・・・・　460

○ : 提出、△ : 長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

３．８　グローバル実践教育推進室

● グローバル実践教育推進室	
○ ハック・ブレッド・アンソニー・・・　466	

○：提出、△：長期休暇、10 月着任、転出などの理由で提出不要

おわりに

評価委員会委員長　村上和人

第三期の中期目標・中期計画の２年目にあたる本年度は、コロナ禍という未曾有の社会状況の中いおいて、ことさら大学人としての使命の確実な実行が求められた年であったといえる。第三期中期目標・中期計画に書かれているいないを問わず、大学の本質的な役割を果たしていくためには、社会からの要請を各教員が認識し、主体的な行動へと変換していくことが重要である。

本年度は評価委員会としても内部質保証について広く意見交換を行い、体制構築に向けた議論を展開してきた。教育力、研究力を継続的に向上させていくための組織的な取り組みの一つとして、自己点検・自己評価報告書の作成は、教員個人が１年間の仕事を総括し、次の課題を確認するためのよい機会であり、平成 18 年（2006 年）以降、継続的に取り組んでいる。本年度で 15 年目を迎えたが、継続的に進めてきた本事業が形骸化することなく、内部質保証体制の構築・運営など次のステップに向けての礎となることが望まれる。

最後に、未だコロナ禍が終息する様相もなく、新年度の教育、研究、大学運営、社会貢献の準備に忙しい時期にもかかわらず全員に協力いただけたことに紙面を借りて感謝申し上げたい。

令和２年度評価委員会委員名簿

	学部等	委員名
学部選出の教育研究審議会委員	外国語学部	広瀬　恵子
	日本文化学部	中根　千絵
	教育福祉学部	湯　　海鵬
	看護学部	服部　淳子
	情報科学部	村上　和人（委員長）
学部選出評価委員	外国語学部	東　　弘子
	日本文化学部	川畑　博昭
	教育福祉学部	瀬野　由衣
	看護学部	森田　恵美子
	情報科学部	山本　晋一郎
事務部門長		鈴木　雅仁
守山キャンパス長		丸山　勝
オブザーバー	副学長（統括）	丸山　真司
	副学長（戦略企画・広報担当）	百瀬　由美子

愛知県立大学
教員の自己点検・自己評価
－ 自己点検・自己評価報告書 －

令和３年３月発行

編集・発行
愛知県立大学　教育研究審議会　評価委員会

〒４８０－１１９８（個別番号）
愛知県長久手市茨ケ廻間１５２２番３

TEL　０５６１－６４－１１１５
FAX　０５６１－６４－１１０１
E-mail　soumuka@puc.aichi-pu.ac.jp